

シベリア抑留の思い出

三重県 奥田 武男

満蒙開拓青少年義勇軍を志願

昭和十四（一九三九年）一月三十日。自分は十三歳十一月で高小を繰上げ卒業して、満蒙開拓青少年義勇軍を志願。我が家を後に茨城県・内原訓練所に入った。

三カ月の猛訓練を受け、四月十日桜満開の頃、敦賀より出港。北朝鮮の清新に上陸。

四月十六日に南満州の昌図訓練所に入所。十一月に北満の鉄力大訓練所へ移行。

十五年十一月、尾山小訓練所に移り、十七年、義勇隊訓練を終了して義勇隊開拓団としての第一歩をふみ出しました。

前方の丘に本部及び第一部落を建設しました。

兵役・現地入営

二十歳で徴兵検査を受け入営。

昭和十九年九月三十日、ハルピンの関東軍入隊。後日、琿春へ転属。

ここで国境警備に付き、各中隊より三人ずつ分遣を命ぜられ、間島の山中へ弾薬庫掘りに行きました。

ソ連軍の侵攻に遭う

昭和二十年八月九日、突如ソ連軍の侵攻に遭い、我が隊は本隊へ追及の途中、凶們で戦闘となりソ連兵と戦う。

戦友も亡くなる。（岐阜県稲葉郡稲葉村、国島国雄）

その仇敵を田代戦友と二人で斥候に行き、銃機を構える敵兵をやっつけた。

八月十五日、連合軍に無条件降伏とか、終戦。

我々兵隊には何も分からない。

その中「ナンヨウへ出発」とのこと。「さあ、南洋へ行くのだ」と荷物も軽くすてた。

満州―北朝鮮の国境、橋の上まで行くとソ連軍のジープとはち合わせとなった。「ヤポンサルダ

ート、武器をステロ」と言うので不思議に思った。

上官は「日本は負けたのだ。皆ここで討ち死にしよう」とまで言った。

また、凶們駆まで引き返し、駅前広場で又銃して「前へ進め。手を上げろ」と兵器の検査だった。

欲の深いソ連兵は、前の人達より時計を何個となしに取り上げ、ポケットに入れた。

自分は腹立ちまぎれにジャリの中に踏みにじった。

中には眼鏡を取られる気の毒な戦友もいた。

戦友の遺体にもここでサヨウナラ。我々は駅前の守備隊跡へ放り込まれた。

前線陣地よりドンドン引き揚げてくる。

狭い守備隊舎は人でいっぱいになり、ここより間島の二八部隊の所まで三日がかりで歩いて移動した。

ここでもますます大勢となり六、七万人の人となる。

中には開拓団の婦人の方まで戦闘帽、軍服姿で

ある。

頭がツルツルで青頭なのですぐ分かる。

ここで一番困ったのは「水」である。

四つか五つしかない井戸。夜中に井戸に行っても長蛇の列でこれには参った。

食べ物も無論ない。倉庫へ盗みに行く。やっと手に入れたのが小麦だ。これを飯盒で何時間炊いても、小麦の腹が切れるだけでブツブツである。

食べたら皆ピーピー。お前もか、俺もだと、皆やられてしまった。

夏だから赤痢がはやった。ここで一カ月間、九月の中旬まで暮らした。

大移動

何万人という大勢の人だった。

千人一組となり作業大隊が編成された。

自分は一〇八大隊。いよいよ出発だ。

ソ連将校は「ヤポンサルダート、東京ダモイ」と言って、我々を一路前進させた。

次から次へと長蛇の列だ。七日も八日もの行軍

だった。

今考えてもよくも歩けたものだと思う。
ただ日本へ帰りたい一心だった。

途中、囚們、琿春(自分の二三部隊のあった所)
戦場の生々しい所を見て通った。

その日、国境の薄暗い夕暮れだった。
飯盒や水筒で川へ水汲みに行く途中、前にいた戦
友が地雷線に引っかかったからたまらない。

彼は吹っ飛んでしまった。

自分は四五度の死角の中ですぐ倒れたが一命を
取り止めた。

後方の人も数人、怪我をした。

十日余りは「ドカン」の音で何も聞こえなかつ
た。今でも左の耳が少々不自由だ。

それでも落伍はできない。残されてしまう。「ク
ラスキー」という町に着いた。

我々の荒野での野宿が始まった。

もうそろそろ寒くなってきた。十月ともなれば
大陸は寒い。穴を掘り、友と背と背を合わせて四、

五人ずつ暮らした。

中旬、やっと待ちに待った汽車の番が来た。こ
こから「ブラゴエチェスク」は近くだ。

「汽車といっても貨車を二段に分け、ごろ寝だ。
これが楽だった。

汽車は走る走る。一日二回ほどしか止まらない。
また止まると半日ぐらいは出発しない。だがもう
安心だ。日本に帰れるものなりと思いついていた。

行く先はソ連・抑留

汽車はハバロフスクより北へ北へと一週間ほど
走った。

何だかヘンだ。

北極星が頭の上近くに見える。

コムソモリスクという町の近くの山の中の引き
込み線へ入った。

二、三日貨車の中で過ごす。

収容所が空いたのでそこに入れられた。

ここはもとノモンハン事件の捕虜の方が入れら
れた所である。

所々に日本字が残っていた。

ぼつぼつと各班より使役に出ると命令が出る。

何の仕事かと思うと、何と満州からの分捕り品を
貨車から下ろす仕事ではないか。

日本軍の被服類、食料品、酒保品と有りど有ら
ゆる物がギッシリ積み込んである。

中には官舎の奥さんの寝巻きまであった。野積
みの山が出来た。

積み荷の間で何枚も何枚も着込んで持って帰る。
着込んで行かないと入口(衛兵所)で検査がある
からだ。

酒保品のお酒も中まで凍っている。

瓶を割ってかじっている。その中悪酔いしてふ
らふらしている。

監視のソ連兵は何事が起こったか分からないの
か、びっくりしていた。

食料倉庫に使役に行った。

帰りに外套の内へ大きな鮭を背中に負っぼして
宿舎へ帰り、皆で食べたこともあった。

とにかく食うのが精いっぱいどうてい色気ま
では行かない。

越冬・食うこと

零下五〇度、六〇度となると、もう寒さを通り
越して痛く感じる。

ある日、道で馬鈴薯を十個ばかり拾って帰り、
夜、飯盒で煮て食べようかと蓋を取れば、何とそ
れは馬糞ではないか。

糞がパラパラと落ちると、もう凍ってしまう。
全く馬鈴薯と同じに見える。何と情けないでは
ないか!

また、春になれば、若芽という若芽は何でも手
当り次第食った。

チリムシや頭ハリの、のびる、タンポポとあらゆ
るものを食べた。

秋にはキララゲ、キノコ(毒キノコ)何でも食
べ。パイパイになった。

また、山で伐採すると五葉松に、手の平ほどの
大きな松笠が付いている。取り勝ちで取ったもの

だ。

油つこく爪ほどの実が入っている。焼いて食った。

とにかく食うことにはガキに等しい。

山へ伐採に入る。雪は膝ほどまでもある。二人一組で大きな二人挽きの鋸で一回りもあるような木を切るのである。

「倒れるぞ！」と大声で合図しても防寒帽で聞こえない。

木の枝でしばかれ他界した友もあった。

シベリアの山は日本の山と違って丘陵地で、山の中でも大きな河もある。池もある。だが冬は皆凍ってどこここない。

夜中に「トレーラー」に木を積みに行くことも度々とあった。

真夜中に目玉が光る狼に出くわすことも度々あった。

雨の降る夜でもズブズブになり駆り出されたものだ。

「働かざる者は食うべからず」の国だからたまらない。

今日仕事をすると、二日後の食事となって現れる。

「ノルマ」

みな仕事に「ノルマ」がついて、各自の働きにより食事がみな違うのである。

ある時、鉄道工事について。これは土木用の土を取るのに、丘陵地に五、六メートルおき、四角に井戸を二十、三十メートルの深さに掘るのである。

二人一組で初日は二メートルぐらいは掘れる。日に日に深くなつてゆく。岩盤が出てくる。ハッパをかける。しばらくは煙とガスで入れない。

木の枝を取って吊り下げ、ふわふわとおびき出し中々大変だ。

深くなるにつれ、何ほど掘ることができない。

毎日「ニエラポータ」だ。

初めの二日、三日は「ハラシヨラポータ」とい

って、多く食事にありつくことが出来るが、それが反対で減量、減量で自分の身体を食ってしまう。

それこそ栄養失調だ。あまりにもバカにしたノルマの付け方だ。

十メートル、十五メートルと掘り、横穴を掘り爆薬を沢山入れ、穴は元通り埋め戻し、いつせい点火する。

山はドンと上がり形は変わった。

「エスカワトル」という大きな機械で線路を引き込み五十トンの貨車に積み込む。

これを二人一組で一夜の中、朝までに五十トンの土砂を下ろさなければいけない。なんと情けないことだろう。

これも生きてゆくためには仕方がない。

冬は鉄棒を真っ赤に焼いて土中へたたき込みハッパをかける。

そんなにまでしなくてもいいのと思うが、シベリアの土は一年中、溶ける時がないのだ。

上が溶け、地下まで溶けてゆく中、もう上から

凍ってくる始末だ。

仕事に行くのに収容所を出て行く。

行く先が二十人、三十人と違う。

衛兵所でロスケの兵隊(監視兵)が人員を当てるのが面白い。

勘定が中々できない。

アジン、ドバ、テリ、チテリ。一、二、三、四と何度でも数えて中々合わない。なんと頭のいい兵隊さんばかりだ。

兵隊さんは手の甲に名前(ファミレ)と生まれた年号を入れ墨している。どこで死んでも分かるように。

我々は、少しでも時間が経てばいい。

仕事の行きはまるで葬式のように、ゾロゾロ、のそのそだ。

帰りは農民より先に家路に急ぐ牛のようだった。

行きは三十分、帰りは十分と違ったようなものだ。

ロス兵隊は言う。

「ヤボンサルダート、ヒイトレ、ムトレ」と言

う。日本兵隊ずるいというのだ。仕事には監督がいる。「ダワイダワイ」とけしかけられる。

中にはとても良い者もいた。いろいろの仕事についた。これもいい経験だった。

命あつての物種とか。今では笑い話だ。

風呂の方式

収容所の風呂は今のサウナ風呂で、四畳半ぐらいの部屋で、壁に穴が開いている。中は石が真っ赤に焼けている。そこへ穴めがけて水をブツかける。ものすごい湯気が出る。

部屋の中は段々になつていいる。熱いのがいい者は、高い所へ上がってゆく。

だが、耳や目が痛い。汗が出る。そこであかよきをする。

出る時は水を一杯かぶる。

出ると床屋さんがつき、脇の下と前をキレイに剃ってくれる。

込む。

このパンが、一人一人皆、分量が違う。

二日前日のノルマによって違うのである。

五〇〇グラム、四五〇グラム、四〇〇グラム、

三五〇グラムという具合だ。

また、これを切るのが大変だ。

大体切つて、不足分は楊枝で付ける。また削つたりする。

ある日、係の将校がやって来て、秤に載せて検査だ。

目方が不足しているといって、お目玉をくつた。

朝切ると夕方までに乾燥して目減りするが、認めてくれない。

そこで考えた。秤皿の裏に豆粒大のダンゴを付けた。

数が多いので千人分も切ると枕ほどの黒パンが二本ばかり浮いてくる。

不足分の分に毛布に包んで隠しておく。見つかったら大変だ。

これは集団生活にはシラミがつきものだからだ。被服も風呂に入っている間に高熱乾燥室で滅菌する。

また、ドラム缶へ入ったこともあった。

炊事係になつた話

次に、炊事係になつた時のことでも書こう。炊事といつても名ばかりだ。

一晩中、牛の頭や山羊、豚の骨を大きな釜で煮る。その汁でスープ、カーシヤ等で、エンバク、高粱、黍、粟などのドロドロ粥である。

頭も一晩炊くと、みなバラバラにはずれる。釜の中をかき回すとあらゆる物が上がってくる。牛の目玉は卵のようで何個も食べた。また肉のカケラもお先に頂いた。

ちよつとすまないが炊事係の特権だった。時には腸も入っていた。

それでも炊事係では腹を満たすことが出来た。

夕食は黒パンである。カワぐるみの粉で焼いた黒パン、口の中でザラザラとなる。スープで流し

零下六〇度の生活

零下六〇度を越すという日も時々ある。もう寒くはない。寒いのを通り越して痛いのである。

手足の先がジンジンしている。

その中にしなくなる。白くローソクのように固くなる。凍傷である。火であぶったり、お湯にも入れたら大変だ。もう切らなければならぬ。

雪か布で感じが戻るまで擦るのだ。

溶けてくるのが痛くて堪らない。だが切ることさえ思えば我慢せねばならない。

次に大、小だ。小便は流れるひまもなくすぐ凍ってしまう。高く盛れてくる。

大便は外で吹きざらし、丸太を二本削つて、その上で用を足すのである。

前も何もかまうこともない。メジロの糞のように盛り上がってくる。用意してある棒で崩すのだ。夜だと足で殴らないと糞で尻を突くからだ。

それを時々、中へ入つてツルハシで砕いて出す。小さいのはスコップで掘り出す。

部屋に入るとニオイがしてくる。溶けてくるからだ。

ツラの皮とお尻の皮は強いものだ。零下六〇度の中でも出さなければならぬ。

顔はマスクをかけると鼻の凍傷は防げるがマバタキができない。

一面、吐く息で真つ白になる。防寒帽よりツララが下がる。

部屋の中はペーチカで不寝番がいて、交代で薪をドンドン焚くからまずまず休むことが出来た。

遺体は冷凍

夜寝る時は元気であった友も、朝にはもう二度と帰らぬ全く悲しいこともあった。

遺体は来春まで、外のテントに積み込まれてしまふ。冷凍だ。

栄養失調で多くの友が亡くなった。

自分も番が回って来るのかと思つたこともあった。

だが、十四歳の時から満州で鍛えた身体がもの

をいった。

冬だった。材木運びをしていて二人で丸太を担いでいた。重いのでフラフラである。自分は前だ。右肩だ。うしろの友は左肩(ギッチョ)。重いから早く腹ばった。それが肩違いだからたまらない。

気がついた時は、病院のベッドの上だった。

それでも早く治ることができて命拾いをした。仕事を真面目にやっていたのが認められ、十日間は特別休養室で、十人が一級食「ハラシヨラボー」をもらい、何一つ仕事をせず、部屋の掃除もしてはいけないと遊んで暮らした。

他の戦友達に申しわけなく思った。

ダモイ・帰国

それから一週間後の夜の点呼の時。「今から名を呼ぶ者は、明日の朝ナホトカへ出発」との事。来る時がついに来た。その夜は嬉しくて寝つけなかった。

まだどこかへ転属かと半信半疑でもあった。

だが今度こそ本当だった。夢にまで見た「ダモ

イ」だった。

各收容所より十人、二十人と集まって来た。千人收容所の一乗乗りだった。

途中、二人ストップ。八人の中に入ることができた。

收容所での教育

ナホトカには第一から第二、第三と收容所があった。

まだ使役はあった。

夜ともなれば共産教育。これには参った。「ネコ」を被って参加する。

ハバロフスク発行で日本新聞があった。

反抗すればまた反動分子だとやられ、帰れない。

「民衆の旗、赤旗は戦士の屍を包む。四肢固く冷えぬ間に血潮は旗を染めぬ。高く立て赤旗を、その陰に生死せん。卑怯者、去らば去れ、我等は赤旗守る」

とよくやったものだ。これも上からの命令でやるのだから仕方ない。

第三の收容所では仕事をせず、故国からの迎いの船を待つのだ。

残る戦友から、「帰ったら生きていこうというこだけ家に知らせてくれ」と頼まれた。

だが何一つ書いたものを持たせないから仕方がない。でも隊長さんだけでもと思い、靴の中へ一筆入れて帰った。

見つかつたら帰るのも取り止めとなる。ヒヤヒヤだった。

山梨の方だった。石和へ旅行すると二度とも面会に来て下さって、昔話に切りがなかった。

甲州土産に沢山ブドウをもらった。隊長さんは、その後二年、計四年で帰国できたとのこと。責任上仕方なしだ。

「君の後、三十人ばかりに、先に帰ったら家に元気で生きていると知らせてくれと頼んだが、知らせてくれたのは君一人だった」と言われた。

今でも五十年余り文通している。

祖国・舞鶴港着

ナホトカに、待ちに待った「山澄丸」がやって来た。

船上の人となれた嬉しさは、何とも筆で書くことは出来ない。

無理をして、船で亡くなった方もいる。

船上に整列して黙祷。海葬である。汽笛が鳴る。

何とも気の毒なことだった。

三日目には祖国が見えた。舞鶴港へ入港。

婦人会の方々と、役所の方々が大勢口々に

「ご苦労様でした。長らくご苦労様でした」と迎えて下さった。

今も目の前にあの時が浮んで来る。

宿舎に入り一夜を明かし、復員手続きとなる。

そのときに、亡くなった戦友国島君のことを書いてきた。

それで厚生省より戦死の公報が出た。

その後、兄さんと奥さん、子供が、私の所へ訪ねて見えた。こまごまと話した。

舞鶴へは誰も迎えに来ていない、分かるはずが

ないから。

京都まで汽車。それより近鉄で故郷へと向かった。

電車は窓という窓、ガラスがなく板なのでうす暗いといったところだ。

昭和二十二年八月二十四日夕方、やっと我が家の敷居を跨ぐことが出来た。

父母二人きりだった。

疲れ切っていたので、一ぺんに台所へのたったまさか元気で帰って来るとは思ってもいなかった様子で、びっくりしていた。

兄弟四人が戦争に召集されていたのだ。

兄二人が戦場に散り、二人生き残ったのだ。

最後に、亡くなった戦友の冥福をお祈りいたします。

合掌

【執筆者の紹介】

奥田武男氏は、遠い縁故関係にある。ある時、

親戚の年回の席で、シベリア抑留の話となった。

奥田氏は、少年満蒙開拓団員として国策に沿って緑の大地を夢見て渡満した。そうして入隊、シベリア抑留と労苦と重ねた人である。昨年の「シベリア抑留の労苦を語り継ぐ集い」で再会し、協会に加入され手記をお願いした。

この手記は、奥田氏が青春時代の苦しみを後世に残したいと記録されたそのままである。

(三重県 森 勇生)

シベリア抑留記

三重県 廣田吉生

はじめに

戦争、それは人間同士が命を奪い合う鬼畜にも等しい残虐非道の行為です。その終結は敗戦でした。

捕虜の身となり、異国の地で祖国日本の安泰と、肉親家族の無事を念願しつつも、極限の苦難に堪え抜いた幾多の試練は、五十余年を過ぎた現在も私の脳裏から離れません。

戦争の恐ろしさを後世に伝える事が、生き残った者の義務と考えまして書き綴りましたが、文章を書くことは全くの素人です。その上に誤字もあり内容は至って拙文ですが、なにとぞご判読下されば幸甚です。

昭和二十年八月〜二十二年十月までの抑留

一、なぜシベリアに抑留をされたのか

日本は昭和十二(一九三七)年七月七日より、中